

■学校経営のポイント

子どもたちのカリマネ

喜名 朝博

現行の学習指導要領の理念を表すキーワードのひとつがカリキュラム・マネジメント(以下、カリマネ)である。カリマネという言葉を用いると何でもスムーズに進むような勘違いをしてしまうが、カリマネは実行しなければ意味がない。カリマネを語るとき、3つの側面のどれを言っているのかが不明確なことが多い。

カリマネの3つの側面

- ・教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと。(教科横断的視点)
- ・教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと。(PDCAサイクル)
- ・人的・物的な体制を確保し、教育内容と効果的に組み合わせること。(学校内外の資源活用)

授業レベルで語られる場合は、教科横断的視点の側面ということになる。6年生の理科「流れる水の働き」の学習の中で、4年生の社会で学習した「自然災害」や5年生の「国土の地形の特色」を想起させ、関連づけることで、浸食、運搬、堆積という川の三作用に実感が出てくる。教科横断的視点でカリマネを進めるには、全学年の学習指導要領の内容が頭に入っている必要がある。教科書もそれをサポートする仕組みを作っているが、教師自身が理解していないと活用は難しい。

図工が理科につながる

「図工のT先生が、よくこねて空気を出さないと(テラコッタが)爆発するって言っていた。やっぱり、暖めると空気は膨らむんだ」。4年生の理科「空気と水の性質」の授業で、一人の子どもがこんな発言をしていた。子どもたち自身が、既習事項や自らの経験を引き出して、考えているのだ。カリマネは教師だけのものではない、子どもたち自身が行うカリマネこそ、学

びに向かう力となるのだ。

教科の引き出し

国語の時間、机の中から教科書やノートを出すように、子どもたちは頭の中の「国語の引き出し」を開けて授業に臨む。算数の時間になると国語をしまって「算数の引き出し」を開ける。よい意味では、その教科の見方や考え方で授業に臨んでいくことになるが、それは教師も同じだ。理科の時間に図工の引き出しは閉まっている。しかし、前述のように、他教科の引き出しを開ければ、学びは深くなる。その教科の教科書の中だけで考えるのではなく、他教科等での学習内容やそれまでの経験を引き出し、結びつけることで、頭の中の引き出しが紐づいていく。これが教科横断的視点のカリマネの神髄だ。

引き出しを開ける言葉

知識が多いことをたとえて「引き出しが多い」という。単に知識が多いよりも、関連する引き出しがいかに早く開けられるか、同時にいくつ開けられるかが重要なのだ。発想の柔軟さとは、引き出しの数と同時に開けられる空間の広さによって決まってくる。

教師が一人でカリマネを行おうとすると、相当な教材研究が必要になる。しかし、カリマネは、子どもたちと教師が協働して行うものと考えれば少し気が楽になる。そのための魔法の言葉がある。

「今までに似たようなことなかった？」

「今までに勉強したことが使えない？」

多くの教師はこの言葉を授業の中で使っているはずだ。この言葉で子どもたちは持っている引き出しを開け始めて様々に発言するだろう。けれども、教師は物知り顔でそれを聞いてはいけない。「そうなんだ、それが使えそうだね」と共感することが大切だ。

(きな・ともひろ=国士館大学教授／全国連合小学校長会顧問)

●新任からベテランまで、新しい時代に求められる校長の学び《最新刊！》

これからの学校を創る校長の10のマインドセットと7つの思考法

喜名朝博【著】 四六判／定価 2,310 円

■研修誌・図書の小社への直接のお申込みは、小社HP <https://www.kyouiku-kaihatu.co.jp>をご利用ください。

